

20 画家トウールーズ・ロートレック (1864-1901) の疾患について

小林 晶

画家アンリ・ド・トウールーズ・ロートレック (Henri

de Toulouse-Lautrec, 1864-1901) は低身長で、これが生涯の悩みであったことはよく知られている。

彼の出自は中世から続く貴族であり、父アルフォンス伯爵は従妹のアデル・タピエ・ド・セレイランと結婚している。アルフォンスとアデルの母親は姉妹であり、両親はいとこ結婚であった。ロートレックは幼少の頃から少し右下肢が短く、容貌も異なり、虚弱であった。偏頭痛、両脚の疲労感、彼を悩ましたが、幼時から絵画が好きでよくデッサンをしていたという。

一八七八年五月(二三歳)低い椅子から立ち上がろうとして、左大腿骨を骨折した。大した外力に起因するものでなく、明らかに病的骨折であった。ギプス固定を受け

ている。あまり体力が回復していないので、歩き回のを禁止されていたが、翌七九年八月(二四歳)散歩中、溝に落ちて右大腿骨を骨折してしまった。

この後遺症もあって、両下肢は短縮したまま成長が停止して、一三歳時の一メートル五〇センチの身長が、後に僅かに二センチしか伸びなかった。手指の短縮もあった。

これ以外に顔貌にも変化が見られた。すなわち、頭部が相対的に大きく、下顎が小さいのが目立っている。判然としない発音は鼻音が多く、歯列形成が不良であった。小児時代には杖にすがって歩行し、身体的コンプレックスが常にあり、自然と好きな絵画に向かっていった。以後のパリでの絵画の勉強、モンマルトルの生活、ムーラン・ルージュとの関わりあいなどは絵画、映画などの芸術面から紹介され、周知のことである。

一方、前述のようなロートレックの身体的態様が、如何なる疾患によるものであったかについては、医学上種々述べられてきた。ことに、戦後は骨系統疾患の研究の進歩につれて、整形外科、小児科、遺伝学領域などで

は、骨形成不全症 (Osteogenesis imperfecta) 論が多かった。しかし、これはロートレックの病像とは明らかに異なっている。その後、軟骨無形成症 (Achondroplasia) / 偽性軟骨無形成症 (Pseudochondroplasia) / 多発性骨端異形成症 (Polyepiphyseal dysplasia) などが提唱された。しかし、否定的意見が多く、今ではこれらも除外された。最も病像に似るのは鎖骨・頭蓋異形成症 (Clidocranial dysplasia) と大理石病 (Osteopetrosis) であるが、一九六二年マローとロートレック (Maroteaux & Lamy) は、「濃化異骨症 (Pycnodysostose)」と命名した新骨系統疾患を発表した。これは四歳男子と一八か月女子の兄妹例で、次のような特徴をもっている。(一) 頭蓋・縫合、泉門の開存、(二) 下顎骨の形成不全、(三) 骨陰影の濃化、易骨折性、(四) 指趾骨の欠損、(五) 常染色体劣性遺伝などである。前述の鎖骨・頭蓋異形成症では、鎖骨の欠損ないし形成不全が必発であるが、ロートレックでは確認されていない。他の骨の構築に変化がなく優性遺伝で、はっきりと別の疾患であるとした。大理石病では、頭蓋骨、下顎骨、四肢骨などには硬化以外の変化がなく、

体格は均整があり、貧血や肝脾腫大を伴う。これも鑑別できると主張した。

マローらは、一九六五年あらためてロートレックの疾患は、本症であるとの見解を示した。以来、内外の諸文献では疾患は確定的なものとして取り扱われて、遺伝子研究も進んでいる。しかし、彼の写真は多数あるが、X線写真は涉猟した範囲では残されていない。わが国では、青池勇雄らが既に一九四六年本症と酷似した症例を、Dysostosis petrosans (硬化性異骨症) の名で報告をしているのが注目値する。なお、日本整形外科学会の方が国における濃化異骨症の登録は、過去一〇年間に一六例である。

(福岡整形外科病院)